

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『ベラミ』における欲望の形成とその変容
Author(s)	島本, 孝治
Citation	フランス文学 , 13 : 15 - 21
Issue Date	1980-05-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040921
Right	
Relation	



『ベラミ』における欲望の形成とその変容

島 本 孝 治

『ベラミ』は、モーパッサンの6つのロマンのうちで、幻滅することのない人物を描いた特異な作品、あるいは、能動的に欲望する人物を中心にすえて書かれた唯一の作品と言えるものである。

ところで、この「欲望」という言葉は我々に、ルネ・ジラルが、その『欲望の現象学』⁽¹⁾の中で定義した「テジール・トリアンギユレル三角形的欲望」という概念を想起させる。この三角形的欲望の最も基本的な構造は、主体から客体へと向う欲望は、一見直線的であるように思えるが、実は、主体と客体に同時に光を放射している「メディアツール媒体」の存在によって「メディアシオン媒介作用」を受けており、その結果、主体の欲望は、「他者による欲望」であって、この媒体の模倣に終始し、常に三角形を形づくるということである。

実際、『ベラミ』を含むモーパッサンの作品の中にも、ルネ・ジラルの概念を満たす要素があり、それに着目したシャルル・カステラが、その『モーパッサンにおける小説の構造と社会的ヴィジョン』⁽²⁾という研究の中で、上記の概念を用いて作品を分析している。

しかし、このカステラの研究とジラルの著書をつき合わせながら『ベラミ』を読み返すとき、我々は一つの疑問を感ずる。それは、主人公における野心、あるいは出世欲という本質的欲望の根源的な形成の問題である。ベラミという人物の野心の源泉はどこにあるのだろうか。そこで以下において、この欲望の形成がどのようにして行われたのかという問題を中心にして、ベラミという特異な人物を導く欲望が作品の中で一体どのように機能し、また、結果的にどのような意味をもっているのかという点について考察してみたいと思う。

〔 I 〕

主人公ジョルジュ・デュロワが我々の前に姿を現すとき、彼の置かれている状況は全く惨めなものであるが、初めの3章において、彼の精神状態と、ここに至るまでの、いわば彼の履歴とを作者は我々に教えてくれる。

《学校を終え、バカローレアに落ちると、やがては将校に、大佐に、將軍になろうと思って軍隊に入った。だが、5年の期限を終える前から軍隊生活にいや気がさし、パリに出て成功しようと夢想していた。／兵役がすむと彼はパリへ出てきた。〔……〕彼は将来を期待していた。まだ心の中に漠然と形はなさないが、確かにそれを生み出

し、育てあげられそうな種々の出来事によって、勝利を得るに違いないと⁽³⁾思っていた。

そして、これまでの経験によって、《その中には何でも見つからぬものはない三重底の箱⁽⁴⁾》のようになってしまった彼の意識の中で、一番強く君臨しているのが《出世したいという欲望⁽⁵⁾》である。

ところが、そんな欲望が、いかに激しいものであるとはいえ、欲望それ自体の力だけで容易に達成され得るはずはない。デュロワも現状を率直に認める。

《何のことはない。飢え死にしかけているよ。兵役が終わると、何か運にありつきたくて、というよりまあパリで暮らしたくてここへやって来たんだがね。もうこれで半年、北部鉄道の事務員をしているよ。〔……〕どうにもしようがないよ。何しろひとりぼっちで知合いもないし、誰に頼むこともできないんだ。何とかしたい気持は大ありなんだが、手段が見つからないんでね。》⁽⁶⁾

つまり、パリで出世したいという欲望も、漠然としすぎている上に、達成のための手段がないために、逆にデュロワを苦しめる結果になっているわけである。こうして作者は、主人公が自力では何もできないこと、他者の存在こそが、彼の意識や行動を導くことを繰り返し強調する。

このように、他者によって左右される存在であるデュロワにおいて、しかし、彼の本質的な欲望がどうして生じたのかという点について作者は明らかにしていない。出世したいという欲望だけは自発的に生じたものであるかのように見える。ここで我々が、作者は人物の欲望の根源的な形成について明らかにしていない、と言うのは、ルネ・ジラルの「ヴェリテ・ロマネスク」という観点において、つまりジュリアン・ソレルにおけるナポレオン、とか、初期のフレデリック・モローにおけるフロワッサールやコミーヌ、というふうな、作者が人物の野心のモデルの存在を、今挙げた『赤と黒』や『感情教育』の場合のように明示していないという意味においてである。

「自発性」という言葉ほどデュロワから隔たったものはなく、後にもっと明瞭になるように、彼の、個別的、段階的な種々の欲望は、他者の媒介作用があって初めて生じるという、まさしく三角形的欲望の枠組の中にある。それでは、出世したいという本質的な欲望の根源的な形成の段階で、デュロワにとってモデルとなった媒体は一体何だったのであろうか。先ほど指摘したように、作者はこの媒体の存在を明言してはいない。理由はいくつか考えられ得る。例えば、若き野心家など、いつの時代にも存在し得るもので、作者はとりたてて媒体の存在を書く必要を感じなかった、とか、あるいはまた、このように根源の曖昧な欲望こそ、《悪漢の種子⁽⁷⁾》たるベラムのあやしげな、不純な開花にふさわしい、などと。しかし、細部に注意しながらテキストを調べていくと、一箇所だけ、この媒体の存在を暗示していると思える記述が見出されるのである。

〔Ⅱ〕

その記述は、物語が第Ⅱ部に入り、デュロワが旧友フォレスチエなきあと、未亡人マドレーヌと結婚して、故郷のノルマンディに旅行する場面に現れる。

実家に帰ったデュロワは妻を自分の部屋に案内する。

《彼は右手の扉から、妻を隣の部屋へ入れた。板瓦をしき、壁を真っ白に漆喰で塗った寒々とした部屋で、寝台には木綿のとばりがたれていた。この小ぎれいで殺風景な部屋を飾るものは、聖水盤のうえに掛けられた十字架と、色刷りの絵が2枚、青い棕櫚の木の陰にポールとヴィルジニーを描いたのと、黄色い馬にまたがったナポレオン一世を描いたのとだけだ⁽⁸⁾。》

分量的にもほぼ作品の中央に位置するこの何げない記述は、実は、作品の構造を考える際に重要な役割を果たすのである。

まず、『ベラミ』という作品のコンテキストにおいて、ナポレオンの絵とポールとヴィルジニーの絵が象徴するものは、物語を機能させる要素である「野心」と「愛」である。従って、第Ⅰ部における修業期を経ていよいよ上昇の階段を登ろうというベラミの欲望を、作者がここで我々に確認させていると考えられる。と同時に、現在の主人公が意識する野心と愛とが、2枚の絵の象徴するそれらに比べてどれだけ異っているかをも示してくれているし、この違いは、また、後で述べるように、物語最後の結婚式の場面において決定的な意味を帯びる。そして、物語の時間を溯って考えたとき、この2枚の絵こそが、我々の疑問であった。あの欲望の媒体という問題の答えとなるのである。

馬にまたがったナポレオン、これは、あのダヴィドの『アルプス越えのナポレオン』を想起させる。そして、それが与えるイメージは、野心を達成してゆく英雄のイメージである。つまり、日々見つめていた、壁に掛かった英雄ナポレオンの姿こそ若きデュロワの欲望の媒体であったことを、作者はここに示していると考えられる。そう考えた上で再びルネ・ジラルの用語を借りれば、ナポレオンは「メディアシオン・エクステルヌ外的媒介」の関係における媒体である。この関係においては、欲望する主体と、欲望の客体を指し示してくれる媒体との距離が、お互いがライヴァルとして競合関係に入れられない程開いている故に、主体は媒体に対して無条件に賞讃の念を抱き、模倣しようとする。しかし、主体が行動の結果手にするのは客体ではなく、客体の獲得の困難さとあせりにほかならない。我々の前に現れ出たときに、デュロワの置かれていた状態がまさにこれと符合するわけである。

同様に、サン・ピエールの作品において、棕櫚の木陰の二人の恋人が与えるイメージは、純粋な愛のそれである。『ベラミ』の中で、様々な形態のもとに愛が果たす役割の重要性を考えると、我々はここに、ナポレオンの場合と同じように、ポールとヴィルジニーの愛を媒体とした、外的媒介による欲望の存在を認めることができる。もちろん、『ポール

とヴィルジニー』の世界とは全く対蹠的である『ベラミ』の世界で、こうして形成された純粋な愛への欲望が実現不可能であるということは明瞭であって、この逆説こそがデュロワの欲望の運命なのであるが、少くとも、この寒々とした部屋で、2枚の絵を眺めながら、若きデュロワが構築していった、自分の未来に対する熱い思いがどのようなようであったか想像することができる。

物語の初期においては、こうして外的媒介によって生じた野心と愛という二つの欲望の対象は、獲得することが困難な故に漠然と混じり合い、デュロワ自身この二つを離して考えることはできない。その結果、二つの対象を同時に所有できるような状況を夢想する。

《彼は自分でも気づかぬうちに、毎晩の習慣どおり、そこはかとなく空想を追い始めた。そして、一挙に希望の実現へと導くようなすばらしい恋愛を想像した。銀行家か大貴族の娘と往来で会って、最初の一目で征服して結婚するというような。〔……〕すると、いつも心につきまとう漠然とした、楽しい希望にまたとられて、当てもなく夜の闇の中に接吻を投げた。それは、待ちこがれる女の姿への愛の接吻であり、渴望する幸運への思慕の接吻であった。》⁽⁹⁾

二つの対象を同時に獲得するためには、結果的に、一方の獲得が、他方の獲得のための手段となることが要求されるのだが、愛という対象が、野心を達成するための手段に移行する、つまり野心が質を落とす過程は、第Ⅰ部においてはまだきわめて微妙で、潜在的なものでしかなく、上記の引用文の最後の箇所が示しているように、デュロワの意識の中で独立した存在であり得る。また例えば、フォレスチエの通夜の際に、未亡人となったマドレーヌの今後について自分の将来と結び合わせながら、デュロワは、彼女と一緒にいたらどんなに出世ができるだろう、と考えるのだが、それと同時に、《とにかく、人生の楽しみといえばこれだけだ。愛だけだ！ 愛する女を腕にたく！ それが人間の幸福の絶頂だ》⁽¹⁰⁾とも感じるのであって、このように愛は、彼の意識において、対象としての真正な、あえて言うなら高貴な価値をまだ持ち得ているのである。そして、愛がそうした状態にある間は、野心の方もまた、単なる出世主義に墮せず、質的な価値によって——ここでは、新聞記者として立派な記事を書こうとすることによって、自らを高めようとする傾向が見られるのである。

しかし、物語の第Ⅱ部の展開においてはどうか。今度は、欲望の媒体の座に、フォレスチエを経て、社長ワルテルが君臨する。従って、媒体は主体の手の届く距離にあり、欲望は「メディアシオン・アンテルヌ内的媒介」の関係にある。この内的媒介におけるデュロワの種々の欲望については、シャルル・カステラが詳しく分析しているので、それをふまえた上で、次にデュロワの欲望の変容について考えてみよう。

〔Ⅲ〕

内的媒介の関係に入ったとき、デュロワの野心は程度の低いものを目ざすことになる。なぜなら、近づき、模倣し得るほど身近にいる媒体が示し得る欲望の客体の程度には、当然限界があるからである。フォレスチエという媒体がデュロワに欲望させ得るのは、その立派な別荘とか新聞社での政治部長の地位、また、見事な記事を書いてくれる妻マドレーヌであって、それ以上のものを欲望させることはできない。従って、媒体に追いつき、それに同化する過程は、それ自体不可能なことでもなかったであろうが、フォレスチエの病死によって事態は急転し、この過程が短期間で容易に実現される。しかし、媒体との同化は、それまでの嫉妬を含んだ羨望を一時的に満足させるだけである。そこで、媒体に対する自己の優越性を明らかにするために、同化した媒体を今度はさらに凌駕せねばならない。しかし、そのためのデュロワの苦しみとあせりが、彼の意識を変えてしまう。つまり、「恐ろしいライヴァル⁽¹¹⁾」として死後も自分を悩ますフォレスチエに対する嫉妬と、マドレーヌの本性を理解できぬいら立たしさが、やり場のない憎悪に変わり、デュロワは、この激しい感情の矛先を、ついには、あれほど望んで妻としたこのマドレーヌ自身に向けるのである。

《女という女はことごとく売女だ。利用してやるべきで、少しでもこっちの心を与えたりすべきではない。〔……〕世の中は強者のものだ。強くならなければならない。すべてのものの上に出なければならない。⁽¹²⁾》

注(10)の引用文とは反対に、デュロワの意識の中で、愛と野心の価値のイェラルシーは逆転し、愛を犠牲にして、野心という欲望のみが翼を大きく広げるのである。

《こんなことで腹をたてるのはくだらん。めいめい自分のことだけ考えればいい。勝利は大胆な者の手におちるのだ。何もかも利己主義にすぎない。しかも、野心や富をめぐめる利己主義は、女や愛を追いかける利己主義よりもましなんだ。⁽¹³⁾》

この決定的な利己主義の自覚の場面から、最後の結婚式の場面まではもう大した距離はない。物語において、一種の神的存在であるワルテル社長自身からも「ベラミ」と呼ばれるようになったデュロワは、名実ともに、勝利者・征服者ベラミとなる。そして、新たな媒体であるワルテルが指し示す巨万の富という対象を、その娘シュザンヌの感情を手段にして手に入れるのである。しかし、ワルテルの、この巨万の富の本質を知っている我々にとって、ベラミが結果として抱く《地上の支配者の一人になったのだ⁽¹⁴⁾》という意識は、欲望の形成期および、いわば潜伏期にあったはずの、質的な価値を全く失っており、量によって変質させられ頹廢してしまった価値によってすりかえられていることは明瞭である。そして、この変容した欲望を最後に祝福するのが神なのである。

《 香炉は安息香のほのかなにおいをただよわせ、祭壇の上では、おごそかな奉献の儀式が行われていた。人の子キリストは、僧侶の呼ぶ声に応じて地上に降臨し、男爵ジョルジュ・デュ・ロワの勝利を祝福した。／ベラミは、シュザンヌのかたわらにひざまづいて、頭をたれていた。彼はそのとき、ほとんど神を信じ、宗教に心酔する気持ちになっていた。かくも豊かな恩寵をくだし、深い敬意を示してくれる神に、感謝の念をおさえることができなかつた。そして、神とはどんなものかはっきり知りもせず、成功を神に感謝した。⁽¹⁵⁾ 》

ほのかな香のにおいにつつまれた教会の中で、愛を犠牲にして可能となった野心の成就をキリストが祝福する、というこの場面は、あのノルマンディの寒々とした殺風景な部屋に飾られた、ナポレオンの絵とポールとヴィルジニーの絵を見守っていた、聖水盤の上の十字架、という構図と見事に対応している。つまり、言葉の高貴な意味での野心と愛を、十字架が見守るという、質的な価値によって支えられた構図の中で生じた本質的欲望が、達成されたときには、頹廢した量的価値に裏づけられた、俗に言う色と欲でしかないものになってしまうのである。それでも社会はそれを認め、教会は祝福する、という所に作者のイロニーがあり、またそれは、量、つまり金銭的な価値体系のみに支配され、《 活気から無気力への減退現象 》、あるいは《 物化の現象⁽¹⁶⁾ 》を呈している当時のブルジョワ社会の徹底的なカリカチュアとなっているわけである。

カリカチュアということから、人物ベラミを操る作家の指が、時に安易に動きすぎる部分もないとは言えない。しかし、根底においては、このベラミこそ、ブルジョワ社会の勝者であるよりもむしろ、あわれな犠牲者にほかならないことを作家は暗示し続けている。なぜなら、物語の幕切れにおいて、ベラミは「地上の支配者の一人」になっているだけで、彼の究極の欲望が、「唯一の支配者」になることであるのは明らかである。この先も、他者の助けを借りて、ますます頹廢してゆく価値体系の中で、ふくらむ欲望を達成しながらも、精神の内部から腐敗してゆくであろう。そして、地上の唯一の支配者となったとき、他人を羨み、模倣することしか知らぬ彼の欲望は、ついに持続的な充実感を得ることなく死滅し、同時に彼も死に向って急速に転落してゆくはずであるから。

このように、ベラミの欲望は、その表面上の華やかさに反比例して、死滅に向っての軌跡を描くことを運命づけられており、『ベラミ』には、真正な価値を持ったものを追求してやまぬ作家、モーパッサンの裏返しのペシニズムがある、と我々は考えるのである。

(注)

- (1) René Girard: *Mensonge romantique et vérité romanesque*, Grasset, Coll. "Pluriel", 1978 (1^{ère} éd. 1961) 邦訳『欲望の現象学』古田幸男訳, 法政大学出版局, 1971.
- (2) Charles Castella: *Structures romanesques et vision sociale chez G. de Maupassant*, L'Age d'homme, 1972.
- (3) Guy de Maupassant: *Bel-Ami* in *Romans*, Albin Michel, 1975. P. 275.
- (4) Ibid. P. 276.
- (5) Ibid. P. 276.
- (6) Ibid. P. 248.
- (7) Guy de Maupassant: *Aux critiques de "Bel-Ami"* in *Chroniques, Etudes, Correspondances de Guy de Maupassant*, Gründ, 1938. P. 155.
- (8) *Bel-Ami*, P. 425.
- (9) Ibid. P. 276.
- (10) Ibid. P. 399. (強調は引用者による。)
- (11) Ibid. P. 438.
- (12) Ibid. P. 442.
- (13) Ibid. P. 442. (強調は引用者による。)
- (14) Ibid. P. 562.
- (15) Ibid. P. 563.
- (16) Charles Castella, op. cit., P. 128.

なお、『ベラミ』からの引用文の訳については、一部変えた点を除いて、ほぼ田辺貞之助氏の訳(新潮文庫)を使用させて頂きました。

(広島大学文学研究科・博士課程後期在学中)